

幕別スポーツ史

まくべつスポーツ史

幕別町体育連盟が昭和33年4月に設立され、40年が経過しようとしている。昭和30年、町内の各種スポーツクラブ・協会を統合、幕別町体育連盟が結成され、初代会長に（故）一宮清龍熊が就任した。この体育連盟は、各単位クラブが会費を持ちより運営したため、ほどなく財政不振となり、連盟の活動も低下、自然消滅の形となった。昭和33年に再建の話が持ちあがり、資金の面を町で補助することで再建、会長に（故）石田勝市が就任、のち（故）加藤光也、木村正夫と引き継がれ現在にいたっている。

昭和63年2月19日、町民会館にて30周年記念式典が開かれ、昭和62年以前の本町のスポーツ活動資料がまとめられた記念誌が発行されている。40周年記念誌では、平成8年に町開基100年を記念し発行された「幕別町百年史」を基に各競技種目の発展をまとめ、また昭和63年以降の10年の体育連盟とスポーツ活動の歩みをまとめてみた。

1. 各競技種目の発展（町百年史より）

野 球



新田 達道

札幌師範学校出身の新田達道が幕別尋常高等小学校に訓導として赴任したのは大正6年3月28日。翌7年3月に着任した札幌師範出身の石井武夫とともに、新しいスポーツを幕別の児童生徒に教えた。

新田は赴任と同時に、当時としては珍しい野球、庭球、柔道、陸上、スキーを、石井は剣道、書道、ソロバンを教えた。新田が指導した野球チームは、他のチームと試合を行うまでに成長し、帯広、池田、茂岩に遠征、かがやかしい戦績をあげた。幕別の野球の始まりである。

昭和3年、止若市街で雑穀屋をしていた長尾昇が、新田ベニヤ工場、統内治水工場から選手を選抜して「止若野球倶楽部」を結成した。長尾ののちは石黒某、白坂久治、榎本孝雄、加藤登が監督として采配を振った。昭和17年に十勝を代表して札幌円山球場に駒を進めた止若野球倶楽部は、中村勲と西尾弘のバッテリーで準決勝に進み、苫小牧王子と対戦して2A-1で敗れた。優勝は苫小牧王子であった。

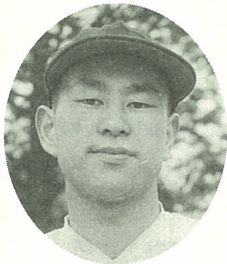
新田ベニヤの職員で組織したチームが全道の野球界に知られるようになったのは津川康郎が監督になってからである。昭和21年、復活第1回オール十勝軟式野球選手権大会（帯広市営球場開場記念）に出場した新田チームは、決勝戦で帯広木材倶楽部を2A-1で破って選手権を獲得し、翌22年の第2回国民体育大会北海道予選の十勝代表となった。中村勲、金谷良のバッテリーで決勝戦に進み、室蘭代表の日鋼に惜敗したが、小樽代表に13A-5、空知代表を2A-1、札幌代表には5-0で勝ち、全道に「新田ベニヤ強し」を印象づけた。当時の選手は津川監督のもと、主将杉山行雄、中村勲、金谷良、小野敬一、金須武、今本仁、大久保正司、杉

森武雄、江口秀雄、深井勝治、宇野昌則、山崎輝昭のほか坂田司、小椋梅男らであった。

止若野球倶楽部は、戦後、佐古敏雄によって再建された。再建はしたが物不足時代に倶楽部を運営する事は並大抵ではなく、揃いのユニホームを作るため、農協倉庫のはきだめをもらい受けて豆よりし、この豆を佐古が大阪まで運んで売却、その金で落下傘の布地を買ってユニホームを作った。止若野球倶楽部は、のち新田チームと合併して「ニュースター」と改称、各種の大会で活躍した。解散したのは昭和26年の秋のことである。

戦後、急速に軟式野球が普及し、業種別大会が開催された。昭和24年、札幌市で開催の全道油糧野球大会に北海道合板化学工業株式会社（新田ベニヤの系列で大豆油を製造）が出場し、優勝している。昭和20年代の後半は町内にも職場チームが結成され、新田ベニヤのほか亜麻会社、農協チームが各種大会に出場し活躍した。昭和28年、社会健康保険野球大会道東地区大会で釧路三輪運輸を破った幕別町役場チームが全道大会に出場した。

昭和29年、名門止若倶楽部が復活した。監督は佐古敏雄、助監督池浦光雄、主将兼外野手大久保正司、投手林照男、柏崎直己、小野隆男、捕手高橋耕三、和田伸一、近藤俊一、内野手山崎輝昭、国枝正義、相原邦好、小野勉、小野邦宣、三好政男、外野手清水実、小尾和夫、佐藤清治、堂山登らであったが、雄図空しく、昭和31年のシーズン終了後に解散した。



法政大学時代の
品田栄太郎投手

昭和16年から中断していた全国中等学校野球大会（現在の高校野球大会）も昭和21年に復活、昭和34年から北海道地域は北と南に分けられ優勝を争い、帯広三条高等学校が北・北海道代表として甲子園出場を果たした。選手14人のうち石原衛紀、矢野郁雄のバッテリーと選手の西尾孝治、星隆一、小田利雄、江口善和、小野成義の七人は幕別町出身である。

なお、帯広柏葉高等学校野球部甲子園出場（昭和24年）の原動力となり、のち法政大学、北海道拓殖銀行野球部で活躍した品田栄太郎、主戦投手として国体に3回出場した帯広営林局野球部の左腕・本庄博美、全国高校野球選手権、選抜高校野球大会と合わせて三度甲子園の土を踏んだのち東海大学に進学、卒業後、母校の東海第四校の監督となった佐々木浩正も幕別町出身である。

昭和30年に町民野球大会、43年から町民朝野球大会が教育委員会の主催で開催された。これらの大会が教育委員会の手からはなれたのは昭和51年。この年の6月1日に組織した「幕別軟式野球協会」が以後、企画、運営している。この軟式野球協会の前身は昭和34年に結成した「幕別野球審判部」。部長の二川辰夫は発展的解散した51年まで再任を続けた。事務局長は国枝正義、堀井守、逢坂勝己とかわった。軟式野球協会の貝森拓司も発足以来の会長である。

卓球

昭和3年、幕別小学校の教員・大橋信二、藤田平治、それに笹原登らによって卓球が普及し、町内から多くの選手を輩出した。昭和12年、帯広市で開催された全十勝卓球大会に大橋信二らのメンバーで団体優勝した。個人では笹原が十勝を制した。このほか、昭和22年度全北海道軟式・硬式卓球選手権大会で、両方の選手権を獲得した長谷川清隆、この年の全日本中学校卓球選手権大会で優勝した若月寿治、帯広庁立女学校時代にプレーヤーとして名をうった秋山サチ

子も本町出身者である。

昭和23年、幕別卓球協会が結成された。主将に長谷川清隆、副主将は若月寿治。選手に中川武夫、会田昭三、藤平景夫、国安宏昌、富西定美、今本和三、藤根一也らを配して活躍、幕別町卓球クラブ結成の下地を形づくった。幕別町卓球クラブは昭和26年5月に結成され、会長に一宮龍熊、副会長に高島米蔵と笹原登が就任した。このほか、新田ベニヤの卓球部も強かった。主な選手には土居徳朗、森田宣雄、小島善一、堀切武夫、竹下徳三らである。



昭和21年の第1回全道卓球大会記念

昭和54年10月に幕別町卓球協会が設立された。会長に森田宣雄、副会長に国安宏昌、藤平景夫、事務局長に小野成義が就任し、卓球教室を開催するなど卓球の普及に努めた。昭和55年5月に幕別町卓球スポーツ少年団、58年に札内南小学校卓球スポーツ少年団、60年には小学生を中心とした幕別卓球クラブが組織されるなど、若い選手の登場によって幕別の卓球史は塗りかえられつつある。特に第44回国民体育大会卓球競技少年男子の部、北海道予選会で優勝、国体少年男子の部で三位となった駒井健一など優秀選手は多い。

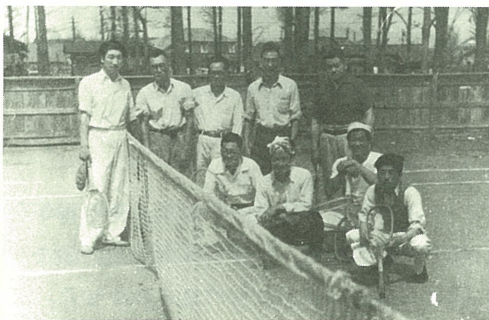
平成3年7月28日、29日に岩手県営武道館で開催された第4回ホープス卓球大会北日本ブロック大会で、幕別クラブの中山知美（札内南小六年）、上平奈波（札内南小五年）、加藤美砂子（白人小五年）の3人は、決勝トーナメントで青森代表に敗れたが3位となった。

庭 球

昭和の初期、新田ベニヤ工場敷地内にテニスコートが造成されたのが、町内でテニスが盛んになった最大の理由。このコートから多くの選手を送り出した。

昭和25年6月、止若在住の同好者によって「止若庭球協会」が組織された。会長に半井勇三、副会長には笹原登と篠田正男が就任し、各種の大会に選手を送った。協会を組織する前の昭和24年から26年までの3年間にわたって、半井勇三、中村実、篠田正男、笹原登、芝木繁、藤島実、品田信、竹内幸男、鳥海八郎、白川醇らによって、連続して十勝町村大会の優勝をさらった。特に竹内は全道硬式選手権を獲得し、全道の庭球界から注目された。

また、中村実、藤島実、北原隆、牛尾毅、芝木繁、芝木藤幸、石橋次雄らによって、昭和29年から31年まで連続して十勝町村大会で優勝したほか、芝木勝幸が昭和33年に全道で優勝、芝木祐之が37年から39年まで国体に連続出場を果たし、39年には全日本学生選手権と東日本学生選手権で何れも3位、40年には東日本学生選手権で優勝した。このほか、十勝大会で優勝した



庭球も新田ベニヤから始まった

選手では齊川進、牛尾昌平、横山諄一らがいる。

昭和46年に牛尾毅、有沢隆則、末吉康弘、稲毛一郎、宇佐見忠士、逢坂幸次、宮本彰、稲毛哲朗、佐古啓二、横川清、奥田仁らで「幕別町軟式庭球同好会」を結成し、新田ベニヤのテニスコートを借りて練習を始めた。待望の町営コートが完成したのを期に、同好会では管内各町村に呼びかけ、昭和52年に第1回大会を幕別町で開催、以後、各町村持ち回りで開催している。同好会では、昭和54年4月の総会で、名称を「幕別町軟式庭球協会」と改めた。初代の会長に同好会長の芝木勝幸が選出された。芝木の後是有沢隆則、末吉康弘、棚田一晴、松村博義が歴任した。

同好会で硬式ボール打ちを楽しんでいたのが次第に人数も増え「幕別町硬式テニス協会」を設立したのは昭和61年4月。協会発足記念大会を農業者トレーニングセンターで開催したのは6月14日。正副会長は中本準一、桂井貴広。

相 撲

これという娯楽もなかった開拓時代は、なにかがあると相撲大会が開かれた。また、各神社の秋祭りでは相撲大会が最大の呼びものであった。大正から昭和にかけて、東京で相撲をとった経験のある広尾の堀田毅（元道議会議員）らによって、素人の相撲協会が結成された。相撲協会では番付を編成し、全道を股にかけて旅を重ねた。この協会に森脇忠吉が「岩ヶ淵」の四股名で大関を張っていた。森脇の全盛時代は昭和4年から5年にかけてであった。そのころ、青年



岩ヶ淵（森脇）の出世相撲

相撲で名が知られた選手は館喜雄、白戸重藏、榊原利一、それに途別の佐々木、横山義雄、札内の木村吉市らである。昭和30年代になって沢田留吉、森脇仁、30年後半から40年代では館昌利、武藤利貞、山田一徳、佐々木房男らが十勝大会で団体優勝している。特に館は昭和38年から40年まで連続して個人優勝をなしてあげている。

昭和60年7月、十勝相撲連盟理事長・森脇仁の呼びかけで「幕別相撲連盟」が発足した。発足以来、堂前豊が会長の任にある。選手は森脇吉広、小師国光、武藤利浩らで、特に小師は昭和61年の第37回全道青年大会相撲の部個人戦無差別で優勝、この年の幕別町開基90年記念式の席上、スポーツ賞が贈られた。

陸上競技

大正5年6月15日、十勝軍人会と青年会が共催の第一回「全十勝連合武術大会」が帯広競馬場で開催された。十勝の体育大会の始まりである。以来、年中行事となり、会を重ねるごとに種目も増え、青年たちの血をわかせた。この連合武術大会は、十勝管内各町村にスポーツ・ブームをもたらし、幕別からも毎年多くの選手が参加し、また村をあげて応援した。

大正12年及び13年の2か年間、高橋富治が5,000mで全道大会に出場した。14年には橋本勝が

岩見沢で開かれた全道大会の400mに、15年には6月の幕別体育大会で1,500mに優勝した服部間一は、7月20日の十勝連合武術大会で800mに優勝、8月15日に小樽で開かれた全道大会に出場した。大正15年の十勝連合武術大会に出場した選手は次のとおりである。

▷300m=藤川久吉(途別)▷400m=西尾嘉男(白人)▷800m=服部間一(新和)▷800mリレー=福家稔、福家定雄(以上新和)、藤川久吉(途別)、清野清司(白人)▷1,500m=高橋邦雄(止若)▷5,000m=高橋富治(止若)▷1万5,000m=坂口勇(唖別)▷1,600mリレー=西尾嘉男、佐藤軍治、佐藤栄治(以上白人)、橋本勝(糠内)▷走高跳=福家定雄(新和)▷砲丸投、円盤投、槍投=福家清一(新和)▷柔道=山田栄(糠内)

昭和に入りスポーツ人口は更に増え、各種大会で幕別青年の名を高めた。昭和2年、坂口勇、花井豊が1万mで全道大会に出場している。昭和5年6月22日、十勝連合武術大会の最中に止若市街で大火災が発生した。消防組員のほとんどが大会に出場していたため消火が遅れ、記録的な損害を出した。この大火災が原因ではないが、翌6年の大会は中止となった。

戦争の拡大とともに陸上競技より武術に重点を置いた大会となり、大東亜戦争への突入によって昭和15、16年で陸上競技は休止の状態となった。この時代のスプリンターとして米森喜代松、佐々木定雄、山本啓三、小野寺誠、大沢豊、板垣恭二らの名があげられる。特に幕別小学校教員の板垣はオリンピック候補となった。米森、山本、佐々木、小野寺、大沢は、何れも板垣の指導を受けた教え子である。戦後、板垣はコーチとして選手の育成にあたった。

戦後の陸上は全幕別青年団体育大会で復活した。全十勝大会に選手を送ったのは昭和24年から。昭和26年7月、川西農業高等学校グラウンドで開かれた第6回全十勝青年団体陸上体育大会で松浦和夫が100mを12秒Fで、鈴木洋子が同じく100mを14秒02で優勝した。鈴木は走幅跳でも優勝している。このほか村田進、橋原加代子、宮本春樹、松田巧、梶尾勲、堀内喜典、山崎愛子らも活躍した。翌27年の大会で松浦は11秒05の大会新記録で二連覇、800mリレーも幕別チームが1分44秒03で優勝した。選手は松浦のほか野越敬正、武田充、橋本常久であった。

町及び教育委員会、体育連盟の共催で開催した「町民運動会」は昭和32年8月24日が第1回大会。以後冷害年を除き開催されたが次第に参加者が少なくなり、昭和42年に中止した。

昭和44年から開催された道民スポーツ大会の第3回までの記録は残っていない。第4回大会以降の十勝大会を制した者は次のとおりである。

大須賀留美子(第4回・走高跳)、秋山雅子(第4回・砲丸投)、相原毅(第7回・1,500m)、本田久子(第10回・走幅跳)、柳橋敏雄(第13回・100m)、藤家博章(第15回・砲丸投)

一方、団体では第11回大会、第14回大会を幕別陸上競技協会が総合優勝したほか、第15回大会、第18回大会では壮年男子が400mリレーで活躍した。

昭和48年の北海道ソ連極東大会に出場した梶田光雄は1,500mで4位に、同じく48年の国体北海道大会で本田敏晴が槍投で優勝、53年の十勝青年大会走高跳で1m80を出した石川雅洋は、全道大会でも1m88を出して優勝した。

幕別陸上競技協会は昭和50年の設立。横山一男、加藤淳子、藤家博章、岡久保幸、戸塚信、箕浦義則らの指導者によって小中学校児童、生徒の活躍は目ざましく、平成3年8月3日、京都府西京極総合運動公園で開催された全国少年少女リレー競技大会女子400mリレーで、幕別小学校の「幕別W・ローマン」が準決勝53秒09、決勝では大会初の52秒51のタイムで優勝した。

十勝の小学生が陸上競技で全国優勝したのは初めて。選手は六郎田恵、佐々木祥子、川上由梨、伊藤由樹、佐藤梨沙の6年生トリオ。男子は52秒83で総合10位となった。W・ローマンとは監督の箕浦義則が尊敬する東独の陸上競技指導者の名。この健闘を讃える会が8月18日に町民会館で開かれ、かつての金メダリスト南部忠平もかけつけて選手を激励した。

一年前の8月25日にも同じ大会で幕別小学女子チームが大健闘している。400mリレーで1位と0秒46、2位とは0秒03差の53秒69のタイムで3位となった。選手は神馬早苗、菅谷亜加里、森智晶、東みどり、橋本裕子の5人（何れも6年生）。

また、平成5年8月29日に東京国立霞が丘陸上競技場で開催された第9回全国小学生陸上競技大会で、糠内小学校6年生の橋本猛は100mを12秒58で3位、途別小学校5年生の高橋亜友美は同じく100mに出場し14秒15で3位となった。



400メートルリレーで全国優勝した
幕別小学校の5人娘

スキー

大正の初め南勢の福家兄弟（稔、定雄、英夫）によってスキーが始められた。大正3年の冬、時の道会議員・菅野光民は、スキーで広尾から忠類に出て、忠類から駒畠、糠内、止若を経て帯広に抜けた。糠内道路で菅野のスキー姿をみた福家兄弟は、積雪の中でも埋らず、しかも軽快に滑る姿に驚いた。福家兄弟がスキーを見た最初である。福家兄弟は、スキーの型に似た牛舎の板をはぎとり、父親の英一に叱られたのは、菅野のスキー姿を見てからのことである。のち、ヤチダモの木でスキーを作り、スキー・スケートの本で滑り方を独学した。

大正の終りに上美生で初のスキー大会が開かれ、福家兄弟を初め、新田達道の教え子が参加して上位を独占した。また、西猿別の山で、数度にわたってスキー大会が開かれた。その都度、山田毅夫が世話人として走りまわった。当時、活躍したのは福家兄弟、長崎幸一、亀井正雄、館喜雄らで、特に福家定雄は、現在の国体予選、当時の神宮予選に3回出場、入賞こそしなかったが好記録をおさめた。

大正13年、中稲志別の内藤宗一は関口道司にスキーの手ほどきを受けた。内藤は当時17歳。陣野原五郎らと、陣野原所有の白馬ヶ丘でスキーを楽しんだ。札内地区スキーの始まりである。その後、内藤宗一のほか陣野原五郎、西尾慶重、清野茂、小田善一、西尾正造、渋谷五郎、種村弥重作、古田一二三、埴田某らと「札内スキー倶楽部」を結成し、白馬ヶ丘で大会を開いた。このスキー倶楽部から西尾弘など西尾兄弟、国体に出場した梅田音市、高校スキー駅伝で2位になった内藤宗春、内藤泰治、内藤琢雄、生出忠雄、西尾勝らを出し、十勝のスキー界から注目された。

幕別町が、国民宿舎幕別温泉ホテルの近くに「幕別スキー場」をオープンしたのは昭和45年12月8日。最大30度、平均18度の傾斜がある初・中級者むきのスキー場。翌46年12月10日には延長228mのリフトも完成した。強い西風で雪が飛ばされるなどの条件の悪さも、自衛隊に出勤

を願って雪踏みでカバーし営業を続けた。昭和50年11月、大雨でスロープの一部が崩れて使用不能となり、これの復旧も困難なことから閉鎖し、リフトも撤去した。だが、スキー場造成時に設けたジャンプ台は、その後50m級に改造し、札内スキー少年団が利用した。第11回笠谷杯全道ジャンプ大会兼第7回全国ジャンプスポーツ少年団交流大会小学4年の部で2位となった酒井修三、同じく小学3年以下の部で優勝した山口和則、昭和61年5月22日に長野県で開催の第



夜間照明のもとでスキーを楽しむ人々

5回全国ジュニアオリンピックスキー競技大会で優勝した太田裕二（札内東中）も、札内スキー少年団の出身。太田は第10回NHK杯全国少年ジャンプ大会2位、第33回NHK杯全道少年ジャンプ大会で優勝するなど、全道、全国に通用する選手が着実に育っている。

幕別スキー場にかわる「明野ヶ丘公園スキー場」がオープンしたのは昭和51年。開基80年を記念し、かつての諏訪山の一部を買収して北側の斜面にスキー場を造成した。この諏訪山の西側は昭和10年代のスキー場であった。

全日本スキー連盟公認指導員で、かつて白馬ヶ丘、白人スキー場で活躍した養島茂、笹原勝博、井沢政助らが中心となって「幕別スキー協会」を組織したのは昭和46年1月20日。会長は梅田音市、のち牛尾 毅、井沢政助、藤原寿美とかわった。幕別スキー協会では、スキー人口の増加、指導員養成を目的に活動した。事業の一つであるスキー教室には町民のほか町外からも参加するなど予想以上の成果をあげたため、北海道スキー連盟に「スキー学校」の開校を申請、認められて昭和61年1月13日に「幕別スキー学校」を開校した。学校長は井沢政助。

幕別歩くスキー同好会は昭和55年11月28日の結成。厳しい気象条件を克服し豊かで楽しい冬の生活をおくる事を目的として組織した。初代会長は植地長男、57年から高橋耕三。役員会で選定したコースを1月から3月まで月3回程度楽しみ、然別湖～糠平湖横断コースなど、十勝歩くスキーの集いにも参加している。

スケート

幕別のスケートは、やはり新田ベニヤ工場から始まった。昭和6年に新田の幹部がフィギュア用のスケートで楽しんでいる写真が残っているところからみると、かなり早い時期からスケートを楽しんでいたようである。当時は一般の大人が気軽にスケートを楽しむ時代ではなく、子供たちが雪の上を滑る下駄ばきスケートが主流であった。昭和12、13年頃になると長靴にバンドで取りつけるスケートで沼や川、馬糞で踏み固められた路上で楽しんだ。スポーツとしてのスケートが盛んになったのは国体スケート大会が帯広市で開催されてからである。

幕別を代表する選手は多いが、草分けは日中対抗競技会の代表となった武田美佐江である。武田美佐江は相川の出身。中学校時代に頭角を現し、帯広大谷高等学校に進んだ。昭和37年2月の第10回日本第二部選手権大会で総合優勝して一部に昇格し、卒業後、長野の三協精機株式会社に入社した。昭和40年12月、日中対抗競技会選考会で総合3位となり代表権を獲得、中国

本土に渡った。オリンピック候補に選ばれたのは昭和41年2月。43年にグルノーブルで開かれたオリンピック冬季大会に出場した。

昭和38年、39年の全十勝中学校大会で優勝した中条静子も相川出身。帯広大谷高等学校に進み、全国高等学校大会で1,000mに優勝し、昭和41年の国体では500m 3位、1,000mは優勝した。一部に昇格し昭和43年4月に三共精機株式会社に入社したが、のち競技の世界から身を引いた。

昭和47年2月、冬季オリンピック札幌大会で500mに出場した肥田隆行は幕別出身。現在の役場庁舎付近で少年時代をすごした。

白人中学校時代に十勝の選手権大会で総合優勝した篠原雅人は千住出身。帯広白樺高等学校で活躍し、卒業後、王子製紙に入社した。オリンピック代表となり、昭和59年2月8日開催のサラエボオリンピック冬季大会に出場、5,000m 24位、10,000mは26位となった。このほか、第9回全道中学校スケート競技会に出場し1,500mで優勝した村田達也、昭和57年1月に八戸で開催の全国高等学校総合体育大会スピードスケート500mで2位となった新保哲らがいる。



スケートを楽しむ新田ベニヤの幹部職員

柔道

幕別に、初めて柔道を持ち込んだのは大正6年3月、幕別尋常高等小学校に赴任した新田達道といわれている。その後、上級学校に進学した者は何れも柔道衣に腕を通しており、かなりの方が柔道に親しんだようだ。大正15年7月、十勝連合武術大会で優勝した山田栄も、その一人であるが、同好会的な組織はなかったようである。

武術としての柔道は、戦後一時中断の憂き目にあったが、徐々にスポーツとして復活をみせ、昭和24年4月に十勝柔道同好会が帯広に組織された。昭和31年、途別青年団柔道部が設立されたのが、幕別に柔道が復活した最初である。発足当時の部員は13人、十勝柔道同好会に加盟した。支部長に田村政夫、部長には安部政夫が就任し、坂上俊夫（途別中学校）を指導者に練習を重ね、昭和36年の全十勝対全釧路選抜対抗試合に横山武を選手に送り出すまでに成長した。小林繁郎が糠内中学校長に赴任したころから、幕別一本に組織化する気運が持ちあがり、昭和44年9月24日に幕別町柔道連盟が発足した。発足時の役員氏名は次のとおりである。

- ▷ 会長 = 山田栄
- ▷ 副会長 = 小林繁郎
- ▷ 理事長 = 安部政夫
- ▷ 副理事長 = 小山章衛
- ▷ 事務局長 = 折笠政弘

翌45年5月「全幕別柔道連盟」と改称し、10月10日に第1回幕別町柔道大会を開催した。一般選手が参加した柔道大会は昭和49年ころまで。以後は高校生、小、中学生のみの大会となり、また、連盟でも青少年の指導に重点を置き、多



世界の王者・上村選手の指導を受ける少年団員

くの成果をあげた。全日本新人体重別選手権北海道予選で二連覇を果たした椛本敏文、同じく78kg以下で優勝した岡誠二、高校時代に活躍した三井政浩、道下訓央、岡田全博、小林信也は全幕別柔道連盟の出身である。

また、東京目黒区の「市島道場」との柔道交流が、幕別町と目黒区の経済交流に発展したほか、連盟の指導者・金野忠の文通がきっかけとなって昭和48年8月に上村春樹が来町し話題となった。上村春樹は昭和51年のモントリオールオリンピックの無差別級で優勝し、8月には金メダルを胸に幕別を再訪、青少年を対象に「柔道教室」を開催し、青少年に大きな夢を与えた。昭和44年から会長の職にあった山田栄は昭和62年に名誉会長に就任、かわって安部政夫が二代目会長となり、平成2年10月10日に、連盟の創立20周年記念式典を札内スポーツセンターで開催した。

バレーボール

スケートの項でも述べたように、バレーボールも新田ベニヤ工場から始まった。終戦の翌年、まだ世相が混んとしている昭和21年に、新田ベニヤ工場のバレーボール愛好者によってチームが結成された。主な選手は山崎長一、北原信治、平塚治郎・昇の兄弟、根田辰雄、丸山啓三、袴塚一俊、鳥海八郎、本庄学らである。新田ベニヤチームは澱粉袋を改造したユニホームで活躍、新田チームの黄金時代を築いた。

当時、十勝のバレーボール界のAクラスは新田ベニヤ、帯広郵便局、日本通運、鉄道工機部、教員団の五チーム。特に新田チームの活躍は目覚しく、昭和22年、23年と連続して十勝選手権を獲得して全道選手権大会に駒を進めた。また、止若で試合が行われると多くの町民が盛んな声援をおくり、新田チームは町民にとってスター的な存在であった。

戦後の不景気、特に昭和24年、25年ころは全国的な不景気の嵐が吹きすさんだ。新田ベニヤも例外とならず退職希望者を募った。退職希望者のなかにバレーボールの主力選手も含まれていたため、チームは小型化し、以後、これという活躍もなく、自然消滅の形となった。このころから職場を中心とした同好会チームが結成された。新田ベニヤのほか幕別中学校、幕別小学校、幕別、札内農業協同組合、幕別高等学校などにチームが組織され、これらのチームで交歓試合が行われた。これらのチームの中で頭角を現わしたのが小尾丁二率いる青年男子チーム。昭和38年から十勝青年大会に出場し、昭和40年優勝、41年準優勝、42年優勝と、常に上位に位置し、全道大会にも出場した。青年男子チームの全盛期は昭和46年まで。以後、選手層も薄くなり、町内大会に参加する程度となった。

新田ベニヤチーム、青年男子チームなど対外的に活躍した割には「幕別バレーボール協会」が組織されたのは遅く、昭和54年に小尾丁二を会長に結成した。協会では家庭婦人、いわゆるママさんバレーボールチームと少年団の育成に重点を置き、また発足以来、春季大会、公区対抗、全町選手権、全町大会を主催し、幅広い年



一世を風靡した新田バレー部

年齢層が参加できるバレーボールの普及に大きな役割を果たしている。

剣道

戦前、銃剣術とともに盛んに剣道大会が開催された。小学校にも木刀を備え、上級生になると防具を着用して試合を行った。これら木刀、防具は終戦とともに処分された。幕別で剣道が復活したのは昭和35年ころ。山口秀勝が中心となって稽古が始められた。昭和40年に相川に住んでいた全十勝剣道連盟理事長の松浦俊行を相談役に「幕別剣道連盟」を結成し、会長に大久保正司を選出、同時に全十勝剣連に加盟し、山口が幕別支部長となった。二代目会長は昭和59



全十勝剣道大会の開会式

年4月から山角芳信、63年4月から中橋定雄が支部長となった。

昭和44年の第1回道民スポーツ大会に出場し活躍したが、翌45年、幕別町が主催し、幕別剣連主管の第1回全十勝剣道大会を幕別高等学校屋内体育館で開催した。幕別剣連も選手団を組み、これに参加した。この幕別を会場とした大会に毎回千人近い剣士が集い、十勝で最も大きな大会となり、十勝の剣道発展に尽した。幕別での大会は12回を数えた。

剣道連盟では発足以来、幕別及び札内に少年団を結成して稽古を積み、十勝管内大会で入賞するなど、著しく上達した。また、中学生以上の自主参加による土曜錬成会は、錬士六段の黒沼友一を中心に、札内スポーツセンターと本町武道館で一週間毎に会場を交替して稽古が行われている。

戦後の主な選手は山口、大久保のほか千葉恵博、高橋秀昂、関根恭一、橋本正司、山田一徳、妹尾英美、下直弘、寺岡徹男。札内では山角芳信、鳥羽誠市らで、ほかに高橋信吾、佐藤俊克、岡定一、田崎迪夫、ニッ山智、岩倉守、中橋定雄、吉田久治。女性では中橋敏子、松野洋子らである。

弓道

役場庁舎と町民会館が建設される前、幕別神社から東側の坂を降りると矢場があった。「体育連盟30周年記念誌」によると、猿別市街が最も賑わったころ、金刀比羅神社境内に稽古場があったと述べている。

春日団地が造成されたとき帯広から転入した鈴木政一、昭和45年から札内に居住の池島多加一郎、49年に札内の住民となった阿部寛司が帯広弓道協会に所属し、市町村対抗大会には「幕別チーム」を編成して参加していた。「幕別弓道同好会」を結成したのは昭和51年。幕別に弓道場がないため帯広弓道協会に籍を置いている。幕別チームとして昭和52年8月の第23回全十勝弓道選手権大会、61年8月の道民スポーツ十勝夏季大会で優勝している。選手は前述のほか加藤哲夫、千葉寿、門屋宏、坂本龍也らがいる。

水 泳

幕別小学校に町民プールが完成をみたが水泳人口は少なく、水泳の普及を目的に「水泳同好会」が結成されたのは昭和46年7月。会長に平井幸男、副会長に加藤光也、理事長に水野晃夫を選出した。のち加藤にかわって大上長治が副会長に、水野の転出で佐藤昇が理事長となった。依田に温水プールが完成したことなどから「水泳協会」改組の声が高まり、昭和51年4月28日に役場地下厚生室で開催の総会で「幕別水泳協会」と改めた。また、役員のうち副会長を幕別、札内、糠内地区から各一名選出した。

▷会長＝平井幸男　▷副会長＝大上長治、小川義男、山田量　▷理事長＝佐藤昇

昭和53年に、父兄からの強い要望から「幕別スイミングスクール」を開校し、高山正、八代芳雄、郷司清、坂本龍也、三好義隆らがコーチとなり指導、翌54年には室蘭市で開催の大会で総合優勝したほか、第11回全十勝学童水泳記録会では、80種目のうち32種目に優勝し、話題となった。

アーチェリー

幕別町アーチェリー協会は昭和48年の設立。会長に勝山衛を選出した。協会では寿アーチェリークラブの結成（54年）のほか、昭和55年には子供から年寄りまで参加できる大会「第1回北海道アーチェリーフェスティバルイン幕別」を主催した。この大会は、のち国体アーチェリー一競技成年の部・少年の部最終予選会を兼ねる大会に成長した。

また、昭和49年からアーチェリーを必修クラブとした幕別高等学校の生徒の活躍は注目された。幕別高等学校では昭和52年以来、春季北海道大会で団体優勝4回、準優勝4回、個人優勝4人。秋季大会では団体優勝4回、準優勝3回、個人優勝4人（63年4月現在）という成績をあげた。特に鎌由芳彰は昭和61年の山梨国体で優勝、幕別高等学校の団体優勝に貢献したことが評価され「南部忠平奨励賞」を受賞した。鎌田の個人50m（36射）325点、30m（36射）337点、合計662点は大会新記録であった。

このほか、第9回秋季北海道高等学校競技大会で優勝した小林英樹、第10回大会優勝の斉藤剛、第10回北海道選抜東大会で優勝した宮部定信も幕別出身である。

ソフトボール

教育委員会が主体となってソフトボールの普及に乗り出したのは昭和48年に入ってからである。また、ソフトボールの正しいルールと普及を目的とした協会設立の声が高まりをみせたところから、豊田実、松本純一、林照男、国枝正義、本保喜秀、小川義男らが準備委員となり、昭和50年11月25日に「幕別ソフトボール協会」を設立した。設立当時の公認審判員は二種2人、三種1人であったが、52年には三種に20人が合格し、協会の基礎を築いた。以後、教育委員会に依存していた各種大会を協会の事業として企画、運営に当たった。

協会では審判実技講習会のほかソフトボール教室を開催するなど正しいルールの普及に努め、また昭和58年8月13、14の両日の第38回国体北海道予選が幕別で開催されたが、これに協会が全面的に協力して成功を収めた。

バドミントン

倉井亮、角田有功、三井巖、谷友勝らによって「バドミントン同好会」を組織したのは昭和42年。会員の技術の向上に努めるとともに、昭和48年から教育委員会に協力しバドミントン教室を幕別と札内で開催したが、練習コートが足りなくなる程に参加希望者が殺到した。道民スポーツ大会に参加したのは50年から。男子は準々決勝まで駒を進めたが、女子は初陣で3位となった。その後、各種大会で何れも上位に進出し、昭和61年には念願の優勝を果たした。また、昭和57年から開催の十勝ワイン杯には優勝四回、準優勝2回の成績をあげている。バドミントン協会と改組したのは昭和55年4月28日。

登山

宮内伸夫、目黒正勝、笹島よしみ、橋本猛夫、三好信一、堀 裕司、助川 豊らで昭和47年5月に発足した「山遊会」は、毎年6月から10月までの間、月に1、2回程度、道内の無理のない山への登山計画を樹て実施した。昭和48年から教育委員会と共催で「町民ハイキングの集い」を実施していたが、54年から山遊会独自で計画した「町民登山」を開催し、参加した町民に登山の苦しさ、楽しさを体験させ、毎回多くの町民が参加する行事となった。

2. 30年から40年の歩み

時代が昭和から平成に変わった10年、体育連盟は18の加盟単位協会（昭和62年）から、22単位協会の加盟する団体となった。昭和63年にサイクリング協会、平成元年にミニバレー協会とゲートボール協会が加盟し21単位協会に、その後平成8年1月サイクリング協会が脱会し、平成8年にアイスホッケー協会、平成9年にサッカー協会が加盟し22単位協会の加盟に至っている。

この間平成元年3月、30年にわたる本町のスポーツ普及発展への功績、また当初教育委員会主導であった各種スポーツ大会を、各単位協会主導へと移行を図る中で、大会運営・企画に関わる研修や演習を積み重ねた功績が認められ、昭和63年度十勝管内教育実践者表彰（社会教育）を受けた。

平成元年度は、十勝発祥のスポーツであるミニバレー、ゲートボール協会の加盟により21単位協会となり、より幅広い競技においてスポーツ活動がなされた。北海道では、はまなす国体が開催され、各地で記念イベントが行われた。本町でも、約1,000名が参加して、9月15日に全町ふれあいマラソンパークゴルフが開催された。札内には念願のスポーツセンターが完成し、12月にオープンした。

近年の全国大会で活躍された、主な方々を見てみると。平成3年8月、京都で開催された全国少年少女リレー競技大会において、幕別小学校6年女子リレーチームが大会新記録で優勝、全国制覇を成し遂げた。

平成6年2月には、札内中学校の田辺昌利が全国中学校スケート大会500mで優勝を飾り、平成8年、平成9年は幕別中学校女子スケート部が同大会に於いて学校対抗で総合優勝を飾り全国2連覇の快挙を成し遂げている。〔幕別町スポーツ賞等受賞者名簿より〕

また、幕別町が開基100年を迎えた平成8年は、様々なスポーツ行事も開催された。8月17・18

日には、モンテリオールオリンピック柔道無差別級金メダリストで全日本柔道連盟男子強化部長の上村春樹氏、そしてアトランタオリンピック金メダリストの中村兼三選手を招いて、講演会と柔道教室が行われた。オリンピック直後ということもあり、子供たちは真剣な表情で中村選手の指導を受けていた。

8月25日には体育連盟〔実行委員会〕主催のスポーツフェスティバルが開催され、小学生から一般まで延べ10競技（軟式野球・ソフトボール・バレーボール・柔道・卓球・ソフトテニス・硬式テニス・弓道・バドミントン・ミニバレー）に合わせて800名の選手が参加した。農業者トレーニングセンター前で開会式が行われ、バレーボール協会の畑山弘子さんの選手宣誓でスタートした。上位入賞者には、シンボルであるスマイルマークの入った開基100年記念メダルと参加賞が送られ、幕別の開基100年をスポーツを親しみながらお祝いした。この日に大会を開催することができなかった競技種目及び冬季競技種目についても、後日各単位協会において記念大会が開催されている。

10月26日には、キャスターとして活躍中のオリンピック銅メダリスト三屋裕子氏を招いて、講演会とバレーボール教室が、札内スポーツセンターと9月にオープンしたばかりの百年記念ホールを会場に行われた。三屋氏の熱意あふれる講演・指導に参加者は聞き入っていた。

平成9年10月には、幕別運動公園陸上競技場がオープンした。当日は、オープン記念式典が行われ、その後オープンを記念した第21回幕別町陸上競技選手権大会が、秋晴れの清々しい天候のもと町内外から約400名の選手が参加して開催された。

以上、簡単ではあるが幕別町体育連盟及び本町のスポーツ活動の10年をまとめてみた。

